



米原 雄二さん
Yonehara Yuji

〔岩下一区〕

よねはら ゆうじ / 甲佐蚤の市実行委員。「甲佐蚤の市」の仕掛け人の一人で、立ち上げ時から地域活性化への取り組みを続けている。

蚤の市のにぎわいが映し出す 活気ある商店街の未来

「若者が町を離れ、後継者不足で商店街にも空き家や空き店舗が目立つようになっていくのを見ながら、何かできないかという思いから蚤（のみ）の市をはじめました」と話すのは「甲佐蚤の市実行委

員会」の米原雄二さん（岩下一区）。甲佐蚤の市は、甲佐町商工会青年部を中心とした同会により運営されており、今年で6回目。米原さんは10月6日（土）～7日（日）に町商店街一帯で開催される同

イベントの発案者で、立ち上げ時から参加している。

蚤の市とはバリなどで開かれる古物市のことで、アンティーク雑貨や小物、飲食物などの出店が並び、掘り出し物を探したり、店主との会話を楽しんだりできる。

「出店された方からも『甲佐の蚤の市は人が集まる』『搬入・搬出がスムーズにでき、運営がやりやすい』と好

評です。住民の方からは『昔の商店街のにぎわいを思い出す』という声も聞きました」と活動の喜びを感じている米原さん。

自身のつての30店舗ほどではじまった蚤の市も、今年は120店舗（うち20店舗は県外）が参加するまでになった。「熊本地震の年は特に大変でしたが、被災された方が『今日は楽しかった』と言える日を作るために開催しました。

これまでで一番の来場があり、盛り上がりましたよ」と当時を振り返り「今年もいろんなお店が商店街に並びます。あなただけの一品を探してみてください」と甲佐の秋のイベントを呼びかける。

「蚤の市を年1回のイベントで終わらせるのではなく日々の経済活動へつなげていきたいです。もっと商店街でのイベントを増やして、多くの方が『商店街に行けば何かやっているので行ってみようか』となればいいですね」と話す米原さんは、楽しい声があふれる商店街の未来を思い描いている。

広報 こうさ

2018年（平成30年）10月号
通巻591号